

銀
河
鉄
道
の
夜

NOKTO DE LA GALAKSIA FERVOJO

ジヨバンニの時間

『銀河鉄道の夜』が放つ不思議な魅力の一つは、賢治独特の視線が見せる「緻密な世界」と「ほんやりした世界」のまじりあいにあります。

賢治は、見えない空気や天の川の水、砂利、輝く三角標や星座早見などには、ワクワクするような「緻密さ」でせまっています。一方、主人公のジヨバンニやカンパネルラなど登場人物の顔には、型も瞳や髪の色にもまったく触れないのです。この徹底した「ほんやりとした世界」は、彼らの住んでいる町の建物にもおよび、木造なのか石造りなのか、町の大きさもはつきりせず、季節さえもほんやりとしています。

初めて『銀河鉄道の夜』を漫画化しようとした時、まず僕はその問題につきあたりました。そこでキャラクターをすべて猫に置き換えて、それ以外の部分は、徹底的に原文に忠実に《賢治が見ようとしていた風景》を描こうと思いました。

そんなわけで僕は、ジヨバンニ君のうしろを、変なおじさんのようにネチネチと追いかけていったのです。

ジヨバンニという名前からして、舞台は南ヨーロッパのどこか、季節はインドウヤスキ、そして星祭りが烏瓜の灯りから、七夕やお盆のイメーシだということで、まあ夏の終わりころではないかと言われていました。

ほんやりと夏の終わりのイメーシを持ちながら、ジヨバンニの放課後を追っていくと、彼は活版所でバイトをします。

この時、はじめて時刻が「六時がつつしてしばらくたつたころ」と現れてきますが、これ以後の時間は出てきません。彼はおよそ6時30〜40分に家に帰り、7時すぎに家を出て星祭りの町に行きます。そして牛乳がもらえず、十字路でザネリたちにひやかされ、落ちこんで天気輪の丘に

向かいます。この時「7時半から8時くらいだな」と僕が思っていると、次の文章に出合います。

牧場のうしろはゆるい丘になって、その黒い平らな頂上は、北の大熊星の下に、ほんやりふだんよりも低く連つて見えました。

そこで、僕は星座盤を取り出し、大熊座を地平線より丘ひとつ上に位置させて、下描きをしていました。天気輪の丘について「青い琴の星が」という文章があります。そこで星座盤を見てみると、天頂付近に〈琴の星ベガ〉が位置しています。

「おお、ピツタリじゃん」僕はそう言いながら、「作品によると、今はだいたい夜の8時だな」と思いつつ、なにげなく星座版の夜の8時の月日を見てみました。

すると針の位置が〈8月23日〉に来ているのです。僕はドキツとしました。

「コレハ、適当ナ空想ノ話ヲハナク、本当ノ時間ト、合致シテイルノダ…」僕はなんだか恐ろしくなりました。

調べてみると、当時の花巻では8月23日がお盆だったので、あきらかに賢治は、この日の夜の星空をながめ、特別な感情をいだいていたのです。お盆は死者と現世の間との交流の夜です。賢治は青い琴の星の輝きを見ながら、死んだ妹のことや、現在の自分の孤独感とこれから自分のとるべき道を考え、この時刻を《ジヨバンニの時間》とも呼ぶべく、作品の重要な柱の一つにしたのだと思つたのです。

〈すべて二重の風景〉と賢治が詩集『春と修羅』で書いたように、ジヨバンニの町の坂道は、どこかで花巻の町の坂道に重なり、カンパネルラのおぼれた河は、北上川に重なってきます。

ですから、毎年8月23日の午後8時に夜空の星を見上

げれば、その星空の光景を見つめるほんの一瞬、僕たちも賢治の声を聞くことができるかもしれません。そしてその声は静かにこつ響いてくるはずですよ。

「ああ、ほんとうにどこまでもどこまでも僕と一緒に行くひとはいないだろうか。」

銀河鉄道の夜に星は見えるのか？

『銀河鉄道の夜』を思つ時、星いっぱい夜空を行く汽車を、だれもが頭の中に連想するでしょう。

僕自身もこの作品をマンガ化する楽しみは、銀河における星々の描写にありました。列車に乗ってからのシーンでは、ごちそうの上にとまった蠅のように手をスリスリしながら、星を描くのを楽しみに描いていったわけです。

賢治の魅力的な文章をネチネチと追いつながら、「ぎつしりと輝いているはずの星空」を、窓の向こうに見える野原の上に、黒いベタをぬつてホワイトで点々々と描いていったのですが、どうもおかしいのです。

なにしろ驚くべきことに、賢治の文章はまったく空をとらえず、野原ばかりを書きつつけるのです。そして黒い野原には〈青白や橙や黄いろの三角標〉が無数に輝いているのです。

野原にはあっちにもこっちにも、燐光の三角標が、うつろしく立っていたのです。……ジヨバンニは、まるでどきどきして、頭をやけに振りました。するとほんとうに、そのきれいな野原中の青や橙や、いろいろかがやく三角標も、てんでに息をつくように、ちらちらゆれたり顛えたりしました。

最初に僕が描いたのは、賢治が晩年に書き直した〈最終形〉ですから、この突然現れた三角標がなんだかわか

らず、鉄道関係の標ではないかと思っていました。

「おかしいで、星が出てこない…」僕はホワイトの星を描く手を止めて、

「なんで星が出てこないんだ？」と思いながら、原稿を読み返してみました。

すると、文章の目線がほとんど野原に位置し、空に行かないことに気づいたのです。そして話が進みへ鳥を捕る人へが出てきて鷺を捕るシーンで、やっと次のように空が登場します。

がらんとした枯梗いろの空から、さっき見たような鷺が、まるで雪の降るように、…

「がらんとした枯梗いろの空ー星は？ぎつしりの星はどこにいったんだ？」僕はまいってしまいました。賢治の文章の目線は「がらんとした空」からすぐに「鷺」に移り、鷺が砂に溶けていくのを追います。

文章全体では、空に目が行くのはわずか四回、しかもその目的は枯梗いろの空にあるはずの星ではなく、へぐでありへろしくであり、へさそりの炎くに向かうのです。「どこに行つたんだ、輝く星々は？」

せつかく描いた空の星を消しながら、プツプツと思つたのです。こうして僕は、星の所在のわからぬまま、〈最終形〉を描いた後、アニメ化されるといふ話の中で、賢治が晩年に修正を加える前の〈初期系〉を描くチャンスを得ていました。

この間、再び資料を調べる中で、測量に使うために丸太や鉄で組み上げたものだという指摘を見つけました。

それでもなお「なぜ〈天気輪の柱〉が〈三角標〉になつてしまつた」という三角標登場のナゾを思いながら、再び夜8時の丘のシーンにさしかかりました。

すると〈最終形〉と〈初期形〉では文章が違つていたのです。〈最終形〉では「天気輪の柱がいつかほんやりした三角標の形になつて」という記述ですが、初期形では「その青白いひかりが、にわかにはつきりした三角標の形になつて」と、青白い琴の輝きが三角標の形になるのです。

「星の光が三角標になるのか…」そう思いながら、「しかし、なんで三角なんだろう？」と星座版を見ているうちに、僕はドキツとしたのです。

「あつ、あるじやないか。よそらにはこんなてつかい三角標が…」それは夏の夜空に浮かぶ、デネブ・アルタイル・ベガがつくる「夏の大三角形」のことに思えたのです。

これらのわたくしのおはなしは、みんな林や野はらや鉄道線路やらで虹や月あかりからもらつてきたのです。

と『注文の多い料理店』の序で書いたように、賢治はいつも風景の中にいます。ですから、賢治は夏の大三角形から〈三角標〉をイメージしたのではないかと推測するわけです。

こうしてみると〈最終形〉をマンガに描いたときに、いくら探しても見つからなかつた星々を、じつは賢治は心をこめて何度も書いていたわけです。

黒い野原のあちこちで《青や橙いろの燐光で輝く三角標》、これこそが銀河鉄道における星々だつたのです。

賢治がこの作品で書きたかつたのは、へほんとうの科学的な銀河ではなく、無数の星々が、三角標の型や天の川の砂利、鷺、ははこぐさ、のろしなどに変化しながら燐光のように輝いている〈特別な空間〉なのです。星が星として現れず、いろんな型に変化し、そこでは死者たちがそれぞれの天上に向かつていくという空間、そここそが

〈幻想の第四次〉の空間なのです。

賢治の瞳が列車の窓からさかんにとらえるのは〈野原の燐光〉であつて、「がらんとした枯梗いろの空」が出てくるのは四回だけ、しかもそこに星の輝きをとらえません。ですから僕は「枯梗いろの空には、星は見えないのではないか」「もし見えたとしても、ほんのわずかでほんやりしたものだ」と思つたのです。

現代の僕たちは、宇宙にはたくさん島宇宙銀河が点在していることを知っています。しかし、賢治がこの作品を書いた1920年代は銀河系の外にはかの島宇宙があるという説がやっと確認された時期で、賢治は次のような詩を書いているのです。

誤つてかあるいはほんとうにか

銀河のそとと見なされた

星雲（ネビュラ）の家はどれだろう

詩「北いっばいの星ぞらに」先駆形Bより

1924年8月17日と記されたこの詩は、『銀河鉄道の夜』が書きはじめられている時期のもので、当時の賢治にとつては、「銀河系の外には星はない」という意識の方が強かつたと思われまふ。たしかにジョン・バニの先生の説明でも、銀河をレンズ模型で語る時、銀河のそとに關しては何も語らないのです。

そうしてみると、「銀河鉄道」と賢治が示した言葉の二コアンスは、〈銀河Ⅱ全宇宙〉という意味に近くなり、いわば宇宙鉄道列車の外に広がる〈真空〉の空の描写は、あいまいになるしかないので、『銀河鉄道の夜』を正確に視覚化しようとする時、今まで述べたように「星が見えてこない」ことに気づきます。

ところが一般に『銀河鉄道の夜』と考えると、星がぎつしりの天体写真の銀河を想像してしまいがちです。

そういった銀河に行く軽便鉄道、これはあきらかに原文が見せる光景とは違つたのです。

銀河にこめた賢治の想い

賢治はなぜ銀河の星を、三角標や宝石やらに変化させてしまったのでしょうか？ その答えを見つけた鍵は、ジヨバンニの、天気輪の丘におけるつぶやきの中に入っています。

ところがいくら見ている、そのそらは、ひる先生の云ったような、がらんとした冷いところとは思われませんでした。それどころでなく、見れば見るほど、そこは小さな林や牧場やらある野原のように考えられて仕方なかったのです。

なぜ、がらんとした冷たいところと思われなかったのか？ それは厳密に言えば、作者賢治が思いたくなかったのです。そして、野原や林や牧場があるように思いたかったのも賢治です。なぜ、そういった想像を彼がしなければならなかったのか？ その最大の理由は、妹トシの死だと思つたのです。

1922年11月に妹が亡くなってから、賢治は半年も詩を書くことができませんでした。再び書きはじめた時、妹のことを想つた「青森挽歌」や「オホーツク挽歌」、「風林」を生みます。

あいつはこんなさびしい停車場を
たったひとり通つていつたらうか
どこへ行くともわからないその方向を
どの種類の世界へはひるともれないそのみちを
たったひとりさびしくあるいて行つたらうか

「青森挽歌より」

とし子とし子
野原へ来れば

また風の中に立てば

きつとおまへをおもひだす

おまへはその巨きな木星のうへに居るのか

鋼青壯麗のそらのむかふ

（ああけれどもそこかも知れない空間で

光の紐やオーケストラがほんたうにあるのか）

「風林」より

こうして、信仰心の強い賢治は、妹の行った場所、妹の魂のあるはずの異空間を、銀河や木星のあたりに探そうとして苦しみます。

「妹の行った場所、そして行く道すじは、がらんとした冷たいところであつてはかわいそつだ、野原や林があつてほしい」と彼は願つて、8月の夜空を見ていたと思つたのです。この痛々しい想像力が、星々を三角標や天の川の砂粒に変えていったのです。したがつて、今日の科学的な銀河観や天体写真的な銀河は、どこまで行つても、午後の授業におけるジヨバンニの先生の知つている銀河にしかありません。ジヨバンニが見てしまつ銀河光景ではないのです。

賢治は、晩年に〈最終形〉として書き直した時、そこではじめて次の文章をオープニングにつくりました。

「ではみなさんは、そういうふうな川だと云われたり、乳の流れたあとだと云われたりしていた、このぼんやりとした白いものがほんとうは何かご承知ですか。」

もし、ジヨバンニが「…ほ、星です…」と答えたら、彼が夢の中で乗る銀河鉄道の窓から見えるのは、無数の星々だけであり、銀河鉄道さえ存在しなかつたと思つたのです。

賢治は、作中で〈銀河〉と〈天の川〉という言葉を使いわけています。

〈銀河〉は科学的で冷静なイメージを与えますが〈天の川〉は原始的（プリミティブ）な感じがします。作品の地上シーンでは〈銀河〉という言葉が多く、夢の鉄道の中ではほとんどが〈天の川〉で占められます。

僕は〈銀河〉という言葉に〈科学〉を、〈天の川〉という言葉には〈心の想像力〉を感じます。宮沢賢治という人は、非常にするどい〈心の想像力〉を持つていたと思つたのです。

《人は、死んだあとどうなるのだろう》

人間は、銀河を星の集まりとしか見えなくなる認識を持った時から、死者と会えなくなるのではないのでしょうか。

ですから、ジヨバンニの先生の質問が、静かに響いてきます。あの声はジヨバンニを通して、実は僕たちに向けてられているのです。

「ではみなさんは、……このぼんやりとした白いものがほんとうは何かご承知ですか。」

（文・ますむらひろし）